パネルディスカッション「宗教２世支援―どうあるべきか」

当法人は 2023 年 3 月 5 日、**「宗教２世支援―どうあるべきか」**というパネルディスカッションを開催し、旧統一教会・エホバの証人・創価学会・その他の背景をもつパネリストと等身大でリアルな「宗教２世」への支援について考えました。その様子を４回のシリーズに分け紹介していきます。

＜登壇者一覧＞

ファシリテーター:	秋本弘毅	陽だまり 理事長
パネラー:	山本ゆかり	日本脱カルト協会 理事
	菊池真理子	『「神様」のいる家で育ちました』 漫画家
	山本サエコ	宗教２世問題ネットワーク 副代表・陽だまり会員
	Pulmo	旧統一教会 ２世
	齋藤幸恵	陽だまり 理事
	ちざわりん	陽だまり 自助支援グループ

――「宗教2世支援」というのは今まであまりなかったテーマかと思います。行政でも検討されたことはなかったかと思いますし、そもそも「宗教2世」という用語自体、ここ2、3年でようやく一般的な言葉として認識されるようになったばかりで、その支援に当たってはまだ議論が十分にされているわけではなく、今回の機会にぜひ皆さんとご議論させていただければと思います。

第一回目：「各教団の宗教２世が抱える課題の差異」

――まず一番最初のテーマですが、「宗教2世」というと、どうしても同質のものとして捉えがちなんですけど、我々が支援していると必ずしも同じではなく、宗教によってももちろん違いますし、同じ宗教や団体の中で同じ影響を受けてるはずであっても、悩みの質や種類が違うことも多いんですね。

ですのでその辺りのご意見を聞いてみたいなと思っております。まず統一教会なんですが、Zoom から Pulmo さん、旧統一教会2世が抱える課題に対して、いかがでしょうか？

Pulmo： 私は旧統一教会の祝福２世として、教団施設で中学２年生まで育ちました。旧統一教会の宗教２世が抱える問題の特徴の一つとして、組織内での結婚を強要されるんですね。結婚可能年齢の 18 歳に向けて、中高生の時期には特に純潔を守らなければいけないということで、恋愛や、恋愛に関連するコンテンツを非常に厳しく制限されます。また異性の友達を作ってはいけないので人間関係の問題にもなっていると思います。18歳くらいに祝福を受けられるように、中・高生になると親が無理やり長期間の修練会に連れて行くという問題も起きています。

あと不登校や、親の言うことを聞かず反抗的である、もしくは精神障害や発達障害がある場合、親がその事実を受け入れられないということがあります。とい

うのも祝福されて生まれてきた２世は２世同士でしか結婚できないという事情があるんですが、その祝福２世には、精神障害や発達障害は含まれていない前提なんですね。ですので、自分の子どもに精神疾患があったり、不登校になってしまったり、発達障害の可能性を学校で指摘されたときは、海外の修行施設で長期間、120 日あるいは 300 日と、学校を休ませて親が連れて行ってしまうんですね。そこには病院も併設されており、反抗的な場合は強制的に入院となり、投薬内容や点滴内容を教えられないまま服薬や注射をされたという体験談を伺っております。

また親世代の高額献金という問題もあります。高額献金により子どもが就学の機会を失ったり、小遣いを取り上げられたり、日々の生活用品や学用品が買えないというような問題が起きたとしても、子どもがそれを取り返すことは非常に難しいんですね。また、自分が子どもの時には分からなかったけど、親が 60 代、自分が 30 代くらいになってから、実は旧統一教会に 1 億円くらい献金してしまって、家の財産が根こそぎないということが分かった場合も、時効の問題があったり、親はまだ信仰中なので「お金は取り返したくない」とごねて、その結果親族の持っているものを勝手に売ってしまったり、家族の財産を使い込んでしまっていても解決がなかなか難しいということもあります。また２世信者自身が高額の献金をしているというケースはかなり少ない、特に祝福２世の場合はそうだと思います。なので裁判で争うことになっても、多くの場合は失った時間や機会を返して欲しいという争いとなり、こうした遺失利益は日本では計上することが難しく成功報酬がとりにくい、裁判で勝ったとしても 10 万、20 万円くらいにしかならないので弁護士も２世の救済に対してはあまり積極的になれないといった事情も問題だと思っています。

先ほど陽だまりの活動紹介にもありました、住宅を借りる際の保証人の支援であるとか、そういったことも全く足りていないと思います。旧統一教会の場合、結婚の強要というところがターニングポイントになる場合が多いので、18 歳前後で脱会を考える未成年の子がかなり多いんですね。親から逃げた後、地縁も血縁もないところで、緊急連絡先、保証人がいない状態で、進学・就職・部屋を借りるということをどうするのか、過去を隠してどう就労するのか、心のケアに関しても支援が全然入っていない問題があると思います。

――かなり深刻な状況を聞くことができました。旧統一教会では「青春を返せ」訴訟など１世の裁判は私も承知してますが、2世の方は先程出たように弁護士も案件として扱いにくいという話ですね。先ほど「祝福2世」の話が出ましたが、もう一つの立場である「信仰2世」、その差があれば教えていただけますか？山本サエコさん、いかがでしょうか？

山本サエコ：私は旧統一教会の祝福２世の立場となります。旧統一教会には「祝福２世」という立場と「信仰２世」という立場があります。信仰２世についてはヤコブなど、そういった専門用語で使われる場合もあるんですが、大きな違いとしては、両親が統一教会に入信してから生まれてきた子どもかどうかというところもあります。合同結婚式によって祝福を受けて生まれてきた子どもが祝福２世、恋愛結婚などで両親が結婚して子どもが産まれてから統一教会に入信した場合は、

信仰２世という立場になります。

——ありがとうございます。私は元エホバの証人なんですけれど、「祝福2世」というのはエホバの証人でいうところの3世に近いかなという感じはいたしました。次はエホバの証人のちざわりんさん、いかがでしょうか？

ちざわりん： エホバの証人は今日も報道がありましたが、輸血拒否や子ども時代は言うことをきかないとムチという体罰を受けたり、辞めてからも「忌避」という形で家族であっても交流をしてはいけないというのが特色かと思います。

他の部分として、私も自助グループ支援をしている中で意外と幹と根っこは共通してる部分が他の教団にもあって、自分たちの教団が絶対だとか、善悪二元論とか、この世はサタンの世の中とか、そういったところは共通点ありますけど、細かい枝葉の部分では、身体的虐待が苛烈だったっていうところですね。

お金の献金の問題は、それほど問題になってないんですけど、時間の献金というところで、無料奉仕で時間の搾取とかですね、あと進学や就職の自由がなかったっていうところでは、他の教団との違いがあるかなと思います。大体そんなところかと思うんですけど補足があったらお願いします。

——ありがとうございました。我々のグループはエホバの証人が多いので共通認識は多いかと思うんですけれど補足はありますか？

齋藤： 補足で、エホバの証人の子どもたちは輸血拒否もそうですが、学校行事等での禁忌も非常に多く、自己決定能力が形成される前の幼少期から自分の意思として社会と対峙し、行事参加などを拒否することを求められ、周りの子と同じように学校生活を送りながら、自分の意思として部活動や進学など一般社会での自己実現を諦めることを、強く、暗に求められるということがあり、教団側の道を選ばなければハルマゲドンの滅びが待っているとか、場合によっては忌避の問題、小さければムチという体罰を受けるかもしれないという中で、自分の意思として常に社会と対峙することを迫られているので、自分で何かおかしいと思い教団を抜けて一般社会に出たとしても、スタートラインからつまずいているということが多く、でも実社会ではそれは「自己責任」という形になってしまう、選択肢がなかったのに「自己責任」となってしまうことに対し、自分でどう折り合いをつけていくかが課題の一つかと思っています。

特に抜け出すのに時間がかかった方は何で気づいて早く組織から出なかったのだろうという自分を責める攻撃に向いてしまったり、たとえ早く抜けたとしてもそれまでの自己犠牲や自己実現を放棄してきた思いは代償が効かない、失われた時間は戻ってこないので、抜けた後も自分の同年代の周囲と比べることにより「本当ならもっと」という思いはどんどん膨らんでいきやすく前にも後にも進めない沼に嵌まりやすい、そんな方も多いかなと思うので、一般社会での自分の適性とかそういうものをしっかり見つめ直す作業も必要で、そういうところに寄り添って支援していくっていう事も課題の一つかと思っています。

――ありがとうございました。私たちは今までエホバの証人問題を中心にやってたのですが、同じエホバの証人でも結構温度差があって、先ほど体罰の話も出ましたけど、実は体罰が全然ないという家庭も結構あったりするんですが、体罰がない、輸血拒否問題に直面しないからといってその人が問題を抱えないかっていうと問題抱えるんですよね。なのでこうすればOK、なんとかなるみたいなそこまで単純ではないんですね。

では、菊池さんは「神様のいる家に育ちました」という漫画で宗教2世の方々を追いかけられ、ご自身も創価学会2世で、いろいろなケースを見ていらっしゃいます。その多様性について解説いただければと思います。

菊池：まず私の体験をお話しいたしますと、14歳の時に創価学会から離れておりますので今現在家族が信仰していて同じ家で暮らしている方とはものすごく違いがあるんですよね。創価学会というものが既に３世、４世たちがいる歴史の長い教団なので、家庭によってとか地域によってとか時代によっての差異がものすごく大きい宗教団体ということは感じております。

エホバの証人の方の体罰にしてもそうですし、統一教会さんのような献金の問題みたいなのも創価学会内にあるんですけれど、その家などによってだいぶ様相が違うというのは感じていますし、一方でみんなが同じように体験している、「自分自身で選んだ宗教ではないのに親の生き方に巻き込まれている」という問題（はあります）。

あとは創価学会で一番注目されるのは選挙へのかなり強い強制があるんですよね。生まれた瞬間から、成人したらどの党に入れるかを決められているというのはすごくおかしなことで、宗教的なことを教えられると同時に政治的なことを教えられていて、政治的なものってどちらかというと俗な話じゃないですか、それを一緒に教えられている混乱がものすごくあったように感じています。

私は漫画の方で創価学会以外に６つの宗教団体の方にお話を伺いまして、統一教会の方とエホバの証人の方にも伺ったんですが、その他の方々のお話を私が代表することもできないんですが、やはり「自分で選んだんじゃないんですけど」「基本的な人権が侵害されている気がする 」っていうことは皆さんおっしゃっておりました。

あともう一つ申し上げたいことは、いわゆる新宗教と呼ばれないような伝統的な宗教の方たちでもやはり同じような悩みを抱えていらっしゃるんですよね。社会で糾弾されるような動きをしていないから自分が宗教を強制されたことを苦しいと言ってはいけないんじゃないか、口を塞がれていないけども塞いでおいた方がいいんじゃないかと自分で思ってしまう「その悩みをどこにも話す場所がない」っておっしゃる方も多いんですよ。なのでいわゆるカルトの問題と同時にカルトと呼ばれないような団体の子どもたちでもどこかで悩みを言える場所だったりとか「実は苦しいんだよね」とか「抜けたいんだよね」って普通に言える場所みたいなものをこの団体で作っていただけたらいいなと思っております。

――ありがとうございます。確かにそうですね。「宗教2世」というと伝統宗教の方は反発して

「カルト2世」と呼ぶべきじゃないかという意見もよくありますが、そこまで単純な話じゃないという感じがしますね。「宗教2世」という言葉が正しいかどうかはまだ議論の余地はあると思いますが、じゃあ伝統の宗教が全く正しいかというとそうでもなく、例えば映画『スポットライト』なんかを見ますと児童虐待が正当な宗教の中で行われてたというのも現実にあるわけですよね。いかにその児童の権利あるいは人権を宗教の名の下に侵害するのを防ぐかは、非常に重要なテーマだと思います。こうした問題はエホバの証人とか統一協会は有名なところですけれど、もっと小さいレベルのところでもいろいろ問題があるんですよね。そういったことについて非常に詳しい山本ゆかり様の方からご説明していただければと思います。

山本ゆかり：　この席に座ってる中で１人だけ私は２世ではないので、ちょっと寂しい感じとここに本当に座っていていいのかなと思いながら、少しでもお役に立てるような情報をここでお話しできたらなと思っています。

今小規模なレベルという話が出たんですが、私自身も小さな団体 、自己啓発セミナー系の団体に１年 10 ヶ月程関わっていた体験があり、そこで子どもの虐待を自分の目で見て児童相談所に通告をした、そこで彼女たちを助け出すことが手が届きそうでできなかったという体験があります。外の世界を知らず、そういう小さい団体の子どもっていうのはもっと狭い世界、信者の数が少ないとかグループの人数が 20 人 30 人のところがたくさんあります。先日ニュースになった東大和の一夫多妻の事件がありましたが、そこも子ども２人が小学生だということで、それはそれで少し違う支援の必要が出てくるのかなと。

特徴によってその団体の支援の必要のレベルの深さや幅が違ったりするので、私はまず「宗教２世」という言葉ではなくいつも「宗教等２世」と言ってくださいということをあちこちでお願いしています。ちょっと海外のことを言うと「宗教２世」という言葉は使われないです。多くの国はキリスト教やイスラム教がベースだったりユダヤ教やヒンズー教がメインだったりするので、ほとんどの国民はみんな「宗教２世」なんですよね。「宗教２世」という言葉を言っても「いえ、みんなそうですよ」となってしまう現実があります。先ほど言われたように既存の組織としては問題のない宗教でもそこの一部の教会や一部の支部がおかしくなる、あるリーダーの下でおかしくなるということは現実に起きています。

最近「カルト」という言葉も少し変わってきて「ハイデマンドグループ」（＝非常に大きなプレッシャーをかけるような団体）という言い方もよくされるようになってきています。

宗教の名の下での虐待というのは菊池さんが今ちょっとおっしゃっていただいたので一つ言うと、やっぱりそこへの反発も出てくるし、宗教側の反対もたくさん出ています。そんな中で「チャイルドフレンドリーフェイスプロジェクト」といういうのができた時期もありました。子どもにとってフェアでフレンドリーな宗教・信仰の継承は何か、宗教団体が自ら進んで考えなきゃいけないということで団体が設立されたこともありました。

――ありがとうございます。海外のことは後でもお聞きしたいと思います。

カルトとされる有名なところの2世が「宗教2世」と言われますけど、最近ですと例えばスピ

リチュアルや陰謀論の人たちが、例えば子ども本人の意志に関係なく子どもにビラを配らせたり必要な治療を受けさせなかったり、世の中を半ば敵視して世界から脱出するような、新しい土地を買ってそこに移転するようなことになると、その子どもも「宗教2世」と同じように強制的に社会と対立するようなことになる、そういうことも十分考えられますので、今後そういった「宗教2世」問題（といっていいのか分からないですけれど）も絡んでくるという感じはしますね。

教団の違いもありますし、同じ教団内でも差異がありますし、先ほど菊池さんもおっしゃったように人権侵害という共通点もあるので、それに対して支援していかなければいけないというのがあると思います。